

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16623

研究課題名(和文)北アフリカ地域の多層文化構造における食用・薬用植物の宗教的意味についての研究

研究課題名(英文) Study on the Religious Significance of Plants in the Multilayered Cultural System of North Africa

研究代表者

喜田川 たまき(渡邊たまき)(Kitagawa, Tamaki)

筑波大学・地中海・北アフリカ研究センター・研究員

研究者番号：50721685

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文):チュニジアにおけるオリーブをめぐる習俗は、イスラーム圏にありながら他の地中海地域の影響を受けた複合的文化状況の中で存続してきた。モロッコの習俗との類似性からかつては北アフリカに広くみられていた食用植物への信仰の一形態と考えられ、さらに聖者信仰との融合の諸相が明らかになった。イスラームとアマジグ文化の境界においては段階的なイスラーム化の過程が見出された一方、その影響の少ないアマジグ村落では先祖、精霊、聖者、母の象徴がオリーブの木に複合的に表象され崇敬されていた。オリーブの木への崇敬はオリーブ農耕によって展開した樹木の宗教的体験であり、個人と共同体を再生する機能を有するということが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「食」は我々の命に深くかわりながらも、その日常性ゆえに現代においてはしばしばその意味が埋没してしまう。東アジアにおいてコメが宗教的意味を持つと同様に、古代からオリーブオイルの産出地として知られる北アフリカでは、オリーブは農産物に留まらず、人々に命を与えるもの、世界に意味を与えるものとして崇敬されている。本研究は北アフリカのオリーブと聖者崇敬が複合した宗教現象の解明に基づき、既存の研究では捉えられていなかった「食」の宗教的意味のレベルを考察するものである。

研究成果の概要(英文): The folk olive customs in Tunisia have survived in the complex cultural context that has been influenced by several Mediterranean cultures, even under Islamic domination. Due to the similarity to Moroccan customs, they are found to be on a form of beliefs in edible plants, and simultaneously of a complex of edible plants and saint veneration, both were once widely seen in North Africa. A gradual process of Islamization was found at the relation between saints and natural objects in the border between Islam and Amazigh cultures. In contrast, in the less affected village of Amazigh, the images of ancestors, spirits, saints, and mothers were represented multiply in the olive trees and revered. Based on this study, it becomes clear that the veneration for the olive trees is a religious experience of trees developed by olive farming and has the function of regenerating individuals and communities.

研究分野：宗教学

キーワード：北アフリカ 食用・薬用植物 聖者崇敬 農耕儀礼 アイデンティティ 基層文化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

歴史上最も古い栽培植物の一つであるオリーブは、北アフリカ・地中海地域の人々の栄養源としてだけでなく生活文化・宗教・慣習においても非常に重要な役割を担ってきた。北アフリカで見られるオリーブをめぐる信仰・宗教的慣習は、主流であるアラブ・イスラーム文明の中で「祝福された木」という表現形態をもちながら、一方でアマジグと呼ばれる前イスラーム的文化においても魔除けや子宝祈願など特徴的な表現形態を獲得してきた。オリーブへの信仰・宗教的慣習は、多文化・多宗教的な地中海・アフリカ世界の構造を端的に表すひとつの事例である。北アフリカ地域においてはこれらの複合的な宗教・文化の影響が融合的に表出され、文明の交差点であるこの地域独特の共存状況を示している。これまでオリーブの宗教的意味についての研究は、教義研究及び象徴研究、人類学的研究においても重点的になされることはなく、部分的対象となるのみであり、北アフリカという地域における食用・薬用植物の文化・宗教的意味の展開と変容を総合的に研究する取り組みはなされてこなかった。一方、今日の農村経済の近代化と「アラブの春」以降のイスラーム化に伴い、近代までオリーブ農家などで残されてきたオリーブをめぐる信仰・習慣は急速に廃れてきている。このことから、チュニジアだけでなく多様な文化的影響が共存しながら現在もオリーブの信仰・習慣の意義を保ち続けているモロッコ・アルジェリアなど他の北アフリカでの調査・研究が必要と思われるに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、イスラーム圏にありながら他の地中海地域の宗教、文明からの影響を受けて複合的文化を有する、北アフリカ社会でのオリーブをめぐる宗教的表象を収集、考察することである。既存の諸研究によっては明らかにされてこなかった浄化、媒体、豊穰といった機能を有するオリーブ信仰を、文献及び現地調査によって明らかにし、人類史的に重要な多層文化の記述・記録を行う事を目的とした。また研究対象となる宗教現象を、地域毎の社会的・地理的特徴によって比較分析し、多層文化形成・持続の要因とその保存に必要なプロセスを解明する事を試みた。当初はチュニジア、モロッコ、アルジェリアでの現地調査実施を予定していたが、予算的制約、またオリーブ関連習俗の収集のために一定地域での継続的調査が必要であったため、チュニジアを主要な調査地として選び、それと比較考察するためモロッコにて補完的調査を行い、チュニジアを主とした北アフリカのオリーブ信仰の解明を目指した。

### 3. 研究の方法

本研究を実施にあたっては、参与観察とインタビュー調査を行うフィールド調査、および文献収集を行った。

(1) 日本国内やアラビア語文献研究所(チュニジア)、国立アマジグ研究所(モロッコ)等において文献収集を行い、植民地時代以降に人類学者によって行われた調査報告書、著作、論文を中心に、北アフリカにみられるオリーブに関連した農耕儀礼、通過儀礼や習俗などを網羅的に調査し、現地調査で得た情報を補完した。

(2) チュニジア北部チュニス県、中部沿岸地域のスース県、モナスティール県、およびチュニジア南部ガベス県、メドニン県、トズール県の6地域において、主にオリーブ生産農家を対象として質問票を用いた予備調査を行った。全体に都市化が進んでいる地域では、伝統的習俗の残存は少ない。また都市化がそれほど進んでいない地方であっても、トズールのような砂漠地域ではオリーブの生育が難しく、オリーブに対する信仰よりもナツメヤシなど、より当地の気候に合った植物への信仰が頻りにみられる。他方、オリーブの栽培が盛んなスースやモナスティール県では、中心部から離れた郊外地域で一部オリーブ習俗の残存が確認されたものの、多くは既に廃れていた。当地でのオリーブの生産はより効率性を重視する集約的体制へと移行しており、その過程で共同体的な信仰はその意義を失っていった可能性がある。最終的に、雨量の制約から集約農業化が困難であるため伝統的な小規模なオリーブ栽培が行われているチュニジア南部ガベス県において、オリーブ関連習俗がより顕著に残存していることから、当地を本調査の対象として選定した。

(3) チュニジア南部のガベス県、特にデメール山系にある村落において本調査を行った。その際、比較のためアラブ系のB村、アマジグ文化の影響を受けたアラブ系村落のM村、アマジグ系のZ村とT村を対象として、オリーブに関連した伝統習慣、食文化、農耕儀礼、崇敬などを調査した。

(4) モロッコ北部メクネス県、フェズ県および南部アガディール県、エッサウィラ県において、補完調査を実施し、文献資料およびチュニジアでの現地調査で得た習俗・宗教実践との比較を試みた。

### 4. 研究成果

#### (1) モロッコ・チュニジア間のオリーブ関連習俗の連続性と変容

北アフリカのオリーブに関する習俗研究は、網羅的フォークロア研究に部分的に含まれる以外はほとんど行われてこなかった。E.Westermarckをはじめとするモロッコ研究者は1920年代

から 40 年代にかけてモロッコにおけるオリーブに関連した習俗を 22 件報告している。チュニジアでの 6 県を対象とした予備調査を行う中で上記のうち 12 件には類似の習俗あり、現在でもチュニジアにおいて行われていることが明らかとなり、チュニジア・モロッコ間の伝統的オリーブ関連習俗に連続性があることが検証された。その宗教的機能から「浄化・厄払」、「力の媒介」、「豊穡・祝福」とに大別してチュニジアにおける残存状況を検証したところ、農村においては三種類の機能すべてが習俗として見出せる一方、都市部においては「豊穡・祝福」の機能を有する習俗もしくは言説のみが確認された。近代化とイスラーム教義知識の増加により、都市部では「迷信的」かつ教義に抵触する「魔術的」習俗は嫌厭され、教義に適合的で合理的にも了解可能な「豊穡・祝福」のイメージのみが残存したものであるという考察に至った。

### (2) 自然物と結びついた聖者信仰

イスラームの聖者と自然物の関係について考察する際には、聖者概念の多様性、即ち預言者の子孫でイスラームの普及に努めた聖者伝の持ち主から岩や木のように人間ではない自然物まで広く含む、聖者という言葉の多義性を考慮に入れる必要がある。それによってはじめて、各々の聖者の特質と自然物との関係について分析することが可能になる。本研究ではまずガベス県デメール山系の 4 つの村落(B、M、T、Z)で実践されている自然物を取り込んだ 16 件の聖者信仰を、その系図や伝説、墓の有無や崇敬者

聖者名	聖域の場所	類型	自然物
シディ・ヤーコーブ	B 村	伝道者	樹木、泉
シディ・サーマル	B 村	地元	樹木、山
シー・ハッドラー	B 村と M 村の間	伝道者	樹木、山、泉
シディ・アリ・ブー・メディエン	B 村と M 村の間	地元/先祖	樹木、山
シャムセツディーン	B 村と M 村の間	伝道者	樹木
シディ・ムバラク	M 村	地元/先祖	樹木、山
ラッラ・ベルブーラ	M 村	地元	樹木、洞窟、山
シディ・アーベド	M 村	先祖/精霊	樹木
シディ・グナウア	Z 村	地元/伝道者	樹木
シディ・ルイジェン	Z 村	地元	山
シディ・ヤフレフ	Z 村	伝道者/先祖	樹木、山
シディ・アブデルカーデル	Z 村	伝道者	樹木、山
カモウル・ブレル	T 村	精霊	樹木、洞窟
オンム・アジーザ	T 村	精霊/先祖	樹木、洞窟
オンム・ラッベース	T 村	精霊	樹木、洞窟
オンム・ジーン	T 村	精霊/先祖	樹木、洞窟

ガベス県四村における自然物と結びついた聖者信仰と類型

の言説などからどういった要素を持つ聖者であるかを「伝道者」「地元」「先祖」「精霊」の 4 つに分類し、特にズィヤーラと呼ばれる聖者の聖地への巡礼実践から、そうした種々の聖者類型各々の自然物との関わりを考察、分析した。アラブ系の村落である B 村と M 村ではより多くの「伝道者」や、「地元の」聖者が見出される一方、アマジグ系村落である Z 村と T 村ではより多くの「先祖」の聖者、そして Z 村より山間部にある T 村では「精霊」とされる聖者への信仰が、自然物への崇拜と結びついていることが明らかになった。即ち自然物と複合した場合、アラブ文化の影響が濃い村ではより制度化された聖者が信仰され、よりアマジグ文化の残存した村では先祖や精霊的な聖者が信仰されていた。また伝道者のように制度化された聖者の場合、自然物との関係は、聖者の生前の行動により説明づけられることが多かった。一方地元の聖者の場合、自然物はより重要性を与えられ、精霊の聖者の場合には自然物はしばしば聖者そのものと捉えられていた。そのことから、チュニジア南部の聖者崇敬には樹木信仰などの自然物への信仰の痕跡があること、即ちイスラーム化の影響下で土着の自然物、精霊への信仰体系が聖者信仰に変容していった過程が、アラブ系文化とアマジグ系文化の境界にある諸村落において段階的に見出された。

### (3) オリーブ聖者複合

上記 T 村を中心としたデメール山系奥地では、他地域で聖者の墓所や聖域へ参詣するのと同様に、特定のオリーブの木への参詣が頻繁に行われている。こうした習慣は現在、チュニジア北部や中部沿岸地域のオリーブ豊作地域では既に失われているが、Westermarck のモロッコの民族誌や E. Dermenghem による北アフリカの聖者信仰の記述から、オリーブへの、そしてそれ以外の樹木への信仰はもともと北アフリカ地域で広く行われていたことが分かった。T 村は、外部からの移民の流入と、アマジグ氏族の人口流出にも関わらず伝統的生活と習俗を比較的守っており、周辺地域のなかでも特異なほど、オリーブの木への参詣が見られる。人々が訪れるオリーブの木は聖者、精霊、先祖、母と複合的に表象されるため、ここではオリーブ聖者複合と呼ぶ。現地調査では T 村の 20 か所のオリーブ聖者複合聖地の参詣に同行し、参詣者やその家族から聞き取りを行った。これらの聖者の多くは公式な記録がなく、没年が明らかになるものではないが、それでも 1) 逸話などから先祖つまり実在した人物であることが分かる場合と、2) 先祖とされながらももはやその人物像が浮かんでこない場合、そして 3) 精霊ないしは木それ自体が信仰対象とされている場合があった。1) や 2) の場合、オリーブの木はその聖者が所有していたか、聖者

の行動に関連付けられた説明がなされるが、3)のように一方最初から木が聖者であり、精霊であるとされるケースも多数発見された。3)の場合には、しばしばオリーブの木の手前に、それを祀る形で社(コッパ)が置かれている。またこうしたオリーブの木の近くでは、非常に多くの精霊目撃譚が報告され、オリーブの木に布などを結ぶ祈願行為も頻繁にみられた。またオリーブ聖者複合聖地の地理的配置を見ていくと、ほぼすべてがT村の市街地から離れた荒野に置かれていた。様々な小さな聖者廟がT村市街地に置かれているのに比べると、その周辺性は特筆すべき特徴である。これはT村での人々の暮らしの重点が、町中ではなく周辺に広がる各々の谷、山にあったことから了解された。牧畜と農業のためには狭い山頂の領域では土地が足りず、また人口集中に耐えうる水の確保も難しいため、多くの家族は町の外の砂漠地域の山間に堰を作ってオリーブの栽培を行い、その近くに洞窟住居を設けて牧畜を行って暮らしていた。オリーブ聖者複合聖地のほとんどに、管理者の氏族の洞窟住居が併設されているが、それはその地が先祖代々に引き継がれてきた氏族居住地であり、オリーブ畑であるということを示している。つまり氏族による小集落の中心に、聖なるオリーブの木が置かれていたことが明らかになった。

オリーブ聖者複合を先祖、精霊、母の象徴として考察したところ、ここでは祖先崇拜、精霊信仰、樹木信仰といったアルカイックな宗教性が、オリーブを象徴として色濃く表れており、木に宿った先祖ないし精霊は、異界との境界上に置かれたものとして、植物の豊穡とそれに深く結びついている人間の産出力をもたらすものとして体験されていることが明らかになった。それは世界で広くみられる「生命の木」すなわち命をもたらす力のある木への信仰の一形態であり、死と再生をモチーフとする普遍的な農耕儀礼のひとつである。その農耕儀礼の表象の背後には聖なるものが現れる境界、異界とこの世をつなぐ柱としての樹木の体験があるといえよう。オリーブ聖者複合は、割礼や結婚式などの通過儀礼、厄除けなど特別な問題があった時に、その場所に戻ることで生まれ直す契機を参詣者に与えている。また家族全体で詣でてオリーブオイルや動物を奉納し、農耕によって得られた作物や家畜、つまり象徴的にかれらの命をオリーブの木に返納する儀礼は、共同体レベルで行われている世界を始原に戻す行為であると解釈することができる。つまりT村のオリーブ聖者複合信仰は、オリーブ農耕によって展開した樹木の宗教的体験であり、それによって個人と共同体を再生する機能を有するということが明らかになった。



T村のオリーブ聖者複合とその社

#### (4) モロッコの習俗と今後の方向

チュニジアでの成果に基づき、オリーブやその他樹木への参詣や関連した習俗の連続性について、モロッコ北部のメクネス県・フェズ県、モロッコ南部のアガディール県・エッサウィラ県で現地調査を行った。北部調査においては、オリーブの一大生産地であることから集約農業が浸透しており、上記(1)(2)(3)の成果で取り扱った習俗は、一部の年配者の記憶にはあるもののほとんどが失われていたことが分かった。一方で南部の調査ではアルガンを中心に習俗を収集したところ、複数の地域でアルガンやその他の樹木に参詣する事例が見つかった。また樹木にまつわる農耕儀礼や通過儀礼なども情報として見つかったが時間的制約から参与観察にまで至らなかったため、プロジェクト終了後も調査を進め、儀礼・習俗実践の詳細なありようを収集し、考察したい。また当初の予定であったアルジェリアでの調査も行い、チュニジア、モロッコの事例との比較やそれによる北アフリカの食薬植物崇敬の全体像を描くことを今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tamaki Kitagawa	4. 巻 5(8)
2. 論文標題 Pilgrimage to old olive trees and saint veneration in North Africa	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Internatinal Journal of Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 264-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tamaki Kitagawa	4. 巻 4(4)
2. 論文標題 Saint Veneration and Nature Symbolism in North Africa	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Humanities and cultural studies	6. 最初と最後の頁 117-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tamaki Kitagawa, Kenichi Kashiwagi, Hiroko Isoda	4. 巻 25-3
2. 論文標題 Transformation of Olive Related Customs and Olive-growing Farms in North Africa	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 砂漠研究（Journal of Arid Studies）	6. 最初と最後の頁 157-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kitagawa Tamaki, Kashiwagi Kenichi, Isoda Hiroko	4. 巻 12
2. 論文標題 Effect of Religious and Cultural Information of Olive Oil on Consumer Behavior: Evidence from Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sustainability	6. 最初と最後の頁 810～810
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.3390/su12030810">https://doi.org/10.3390/su12030810</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Tamaki KITAGAWA
2. 発表標題 Surviving Customs of Pilgrimage to Olive Trees in North Africa
3. 学会等名 The European Conference on Ethics, Religion and Philosophy 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tamaki Kitagawa
2. 発表標題 Saint Veneration with Symbolism of Nature in North Africa
3. 学会等名 Tunisia-Japan Symposium on Science, Society and Technology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tamaki Kitagawa
2. 発表標題 Olive Culture in North Africa: Pilgrimage to Old Olive Trees
3. 学会等名 The 1st International Scientific Meeting on Olive Oil (ISM002016) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tamaki Kitagawa
2. 発表標題 Identity and its Transformation in the Annual Festival of Berber Village
3. 学会等名 Tunisia-Japan Symposium on Science, Society and Technology (TJASSST 2015) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tamaki Kitagawa
2. 発表標題 Living Religion and Sainthood: Tunisia and Japan
3. 学会等名 Tunisia-Japan Symposium on Science, Society and Technology 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamaki Kitagawa
2. 発表標題 The Possibility of the Religious and Cultural Information as a New Added-value of Olive Oil
3. 学会等名 The European Conference on Ethics, Religion & Philosophy 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 喜田川たまき	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書房	5. 総ページ数 5
3. 書名 「マトマタのアマジグ村落 荒野に実るオリーブ」松原康介編『地中海を旅する62章』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----